日本中國學會報　第七十五集
二〇二三年十月七日　發行　抜刷

『封神演義』の改作について

尾崎　勤

『封神演義』の改作について

尾崎　勤

はじめに

明代の章回小説『封神演義』全一百回には文章を節略する簡本がある。[1] 清末の鉛印本では第九十九回の神々のリストが改變される。[2] 不揃いな雜言詩を規則的な詩型に作り變える版本もある。[3] しかし本稿で論じようとするのは以上のような現存本における末梢的な改作ではない。現存本に先立って行われたはずのもっと根本的な改作である。

『封神演義』の現存最古の版本は國立公文書館内閣文庫[4]に藏される明・金閶舒氏刊本である（以下「舒本」。本稿における『封神演義』の引用は舒本を底本とする）。だが舒本は『封神演義』最初の版本ではなく、同内容の底本が存在したと思われる。さらに底本も最初の版本ではなく、底本に先立ち、分則本や韻文・美文の數が少ない本が存在した可能性がある。これを古本と稱することもできるが、分則と分回は形式上の違いに過ぎず、韻文・美文が少なくても話の筋に變りはないから、廣い意味では今本の範疇内にある。[5]『封神演義』には廣い意味での今本に先立ち、内容が大きく異なる古本が存在しただろうというのが本稿の主旨である。以下『封神演義』の今本とは現存本と形式上の違いや韻文・美文の數の違いはあっても、エピソードや登場人物は異ならない本と定義し、古本とはエピソードや登場人物が現存本と異なる本と定義する。

古本について考える上で不可缺の史料は『封神演義』の先行作品二種、元刊の『武王伐紂平話』と萬曆刊の『列國志傳』の商代部分（卷一）である。[6] しかし『封神演義』と先行作品のあいだには質量ともに大きな落差がある。量的には『封神演義』は『武王伐紂平話』と『列國志傳』卷一のおよそ十七倍[7]、質的には『武王伐紂平話』と『列國志傳』が歴史小説の枠内に收まるのに對し、『封神演義』は神仙と魔術が入り亂れる神魔小説と化している。

先行作品と落差があるのは『三國志演義』『水滸傳』『西遊記』も同じである。だがこれらの小説には先行作品（『三國志平話』『宣和遺事』『大唐三藏取經詩話』）との中間段階を傳える史料（戲曲、筆記、書目、類書など）が種々殘されているのに對し、『封神演義』に言及する最古の史料は魯迅『中國小説史略』が取り上げた『平妖傳』の張無咎序をいまだに遡らない。[8] 遡らないどころか、今日では『平妖傳』の張序は崇禎（一六二八～四四）重刊本で書き換えられていて、泰昌元年（一六

二〇）原刊本には『封神演義』への言及がないことが判明しているので、むしろ後退している。[9]

したがって『封神演義』の場合、古本の姿は現存本から透かし見るしかない。手がかりとなるのが『封神演義』第九十九回の神々のリストである。『封神演義』では作中で死んだ登場人物たちが最後に神に封ぜられ、その神號と姓名が第九十九回に列擧される（このリストを以下「封神表」と呼ぶ）。[10] ところが本篇で死んだはずの人物の多くが封神表に未掲載であるという問題がある（以下『封神演義』の「本篇」とは『封神演義』の封神表以外の部分と定義する）。これは彼らが本來登場しないか、死なない人物だったことを意味するのではないかと筆者は舊稿で指摘した。[11]『封神演義』の古本を今本に改作した際、元は死なかった人物を死なせたり、新たな人物を追加したりしたが、それに合わせて封神表を修正するのを怠ったため、古本の痕跡が封神表に殘ったと考えるのである。

その後、上原究一が『西遊記』第九十九回に掲載される「聖僧歴難簿」（三藏法師が遭遇した八十一難のリスト）と『西遊記』本篇の齟齬を根據に『西遊記』古本の內容を推定して、現存最古の世德堂本が『西遊記』最初の百回本であることを明らかにした。その際、拙論を傍證として利用していただいた。[12] これでこの方法が有效であることが確かめられたと思う。そこで舊稿ではアイデアにとどまった封神表によって古本を推定する試みに本稿では本格的に取り組み、『封神演義』の改作の歴史を跡づけてみたい。

そのためには恣意的に選んだ二、三の例ではなく、封神表の人名と本篇の死者を全數調査する必要がある。その結果、封神表の未掲載者に未死・未登場では說明できない者が多ければ、この方法は見直さざるを得ない。むろんすべての未掲載者が未死者か未登場者である必要はない。特に深い謂れのない、單なる記載忘れがあってもおかしくはないからだ。しかし記載忘れで濟ませて良いのは、記憶に殘らなくても不思議はない印象の薄い人物に限られるだろう。重要人物については未掲載の理由が說明できなくてはならない。

一　封神表の基礎的檢討

本稿と原文の對照を便ならしめるため、封神表所載の神々に通し番號をあたえる。最初に清福神に封ぜられる栢鑑が001番である。類ごとの番號の割り當ては以下のとおり。

清福神001　岳神002～007　雷神008～032　火神033～038　瘟神039～045
星神046～331（斗母046　五斗星047～074　羣星075～189　二十八宿190～209
三十六天罡210～245　七十二地煞246～317　九曜星318～326　水德星327～331）
歲神332～343　四聖344～347　財神348～352　四天王353～356　哼哈二將357～358
痘神359～365　紫姑神366～368　分水將軍369　氷消瓦解之神370～371

神々の數は設定上は三百六十五柱だが、最後の氷消瓦解之神（飛廉と惡來が第百回で處刑されて封ぜられる）の番號が370番と371番であることが示すとおり、實際の數は三百六十五人を超過して、のべ三百七十一人に上る。のべと言うのは丁策（第九十四回で死亡する商將）が105帝輅星と138大殺星に重複して封ぜられるからである。

この三百七十一人は全員が本篇に登場するわけではない。封神表の人名や類ごとの標題の下にはときに「萬仙陣亡」「皆萬仙陣」などと

いう注記がある。これは第八十二回から第八十四回にかけて展開する萬仙陣の戰いで實は死んでいたことを意味する。要は人數合わせである。封神表では少なくとも百六十四人が萬仙陣死亡者ということになっている。「少なくとも」と言うのは108天醫星錢保の下注の「皆萬仙陣」、160十惡星李德武の下注の「俱萬仙陣」が前のどこまでかかっているのか、わからないからである。また「ということになっている」と言うのは百六十四人中には明らかに萬仙陣死亡者ではない四人が含まれるからである（次章で論じる）。また封神表には「萬仙陣亡」の注記はないが本篇に未登場の人名もあり、結局、三百七十一人中、本篇未登場者は萬仙陣死亡者（件の四人は除く）を含めて二百十五人になる。

逆に本篇の登場人物で、死んだ記述がないのに封神表に名のある者が十八人いる。049東斗星姬叔度、051西斗星黃天祿、052西斗星龍環、057中斗星晁雷、060南斗星周紀、071北斗破軍星蘇全忠、081太陽星徐蓋、110宅龍星姬叔德、111伏龍星黃明、112驛馬星雷開、121飛廉星姬叔坤、127五鬼星鄧秀、128羊刃星趙升、129血光星孫紅焰、132天狗星季康、141歲破星晁田、246地魁星陳繼眞、366感應隨世仙姑雲霄娘娘である。

十八人のうち、敵方の人物は112雷開、246陳繼眞、366雲霄娘娘である。陳繼眞は音の通ずる人物が商周雙方に登場するが（崇侯虎の將、陳繼貞と蘇護の將、陳季貞）、封神表で隣り合う247地煞星黃元濟は崇侯虎の將なので、陳繼眞もそのつもりだろう。敵方三人の死が描かれないのはおそらくミスなのだろうが、殘り十五人に關してはそうとも言えない。十五人はすべて周の武將であり、周の武將の戰死者は個々人の名前は出さず、人數だけ記されることがあるからである。例えば「魔家四將一戰、損周兵一萬有餘、戰將損了九員」（第四十回、卷八・六三b）という具合に。十五人も周軍が大打擊を受けた戰鬪で實は死んでいたという設定だと考えられる。[13]

三百七十一人から本篇未登場の二百十五人と登場するが死の記述のない十八人を引くと、殘りは百三十八人である。ところが本篇で死亡する登場人物は百三十八人にとどまらない。

附表は『封神演義』の本篇で死んだ記述のある人物すべてをリストアップしたものである。『封神演義』全篇を二十八のエピソードに分かち、各エピソードの死者を封神表に名のある者と名のない者とに分けて擧げる。エピソードは主として戰いによって分かち、周が商の討伐軍を迎え擊つ戰いは討伐軍の總帥と主な助っ人の名を用いて「（人名）との戰い」と稱し、周軍の遠征は「（地名）の戰い」と稱する。十一番目のエピソード、鄧九公との戰い（第五十二～五十六回）は死者が出ないので表から省く。［ ］内の數字は死亡する回。封神表に名のある死者には通し番號と神號を冠する。本篇と封神表で人名に異同がある場合は本篇の表記を主として、封神表の表記を（ ）内に附記する。伯邑考／伯夷考のように本篇中にも異同がある場合は歷史的に正しい表記、もしくは死亡する場面で使われる表記を採る。ゴシック體の人名については後述。

結局、『封神演義』の本篇に死んだ記述のある人物はのべ二百四人、うち封神表に未掲載の死者はのべ六十六人である（のべと言うのは⑭と㉔のエピソードで死ぬ姬叔明のように二度死ぬ人物がいるからである）。

もっとも六十六人全員が封神表に缺くべからざる人物というわけではない。自然死した文王（第二十九回）と宋異人夫妻（第百回）は橫死者ではないので封神の對象外だろう。武吉の過失で事故死した兵士の王相（第二十三回）は橫死者ではあるが、端役に過ぎないから、封神されなくても不思議はない。截教（道教異端派）の龜靈聖母は西方教

（釋尊以前の佛教）の教主に調伏されたあと、教主の弟子の手違いで死ぬが（第八十三回）、最終的に死ぬとしても、一度、西方教に移籍した者は中國の神になる資格を失ったとも考えられる。このような若干の例外はあるものの、未掲載の死者のほとんどは他例に照らせば、封神表に載る資格が十分にある。したがって有資格者なのに未掲載の死者が約六十人もいることになる。

六十人の中には單なる記載忘れもあることを考慮しなければならないが、誰をおぼえて誰を忘れるかは主觀に左右される。そこで主觀を排するため、未掲載者をひとまず地位の高下によって機械的に分かつことにする。附表でゴシック體にしたのが上位者である（ただし文王はおそらく封神の對象外なのでゴシック體にしない）。諸侯や卿は上位者で大夫は下位者とする。后妃なら正后は上位者で妃妾は下位者、武將なら一軍の將は上位者で部將は下位者、仙道なら一門の師は上位者で徒弟は下位者である。むろん影の薄い上位者や印象深い下位者もいるから、地位の高下は記憶の殘りやすさの絶對的な規準とはなしえないが、だいたいの目安にはなるだろう。

未掲載者は二十八のエピソードに滿遍なく分布するのではなく、特定のエピソードに偏る傾向がある。このことは彼らだけでなく、彼らの死ぬエピソード自體が增補された可能性を示唆する。わかりやすいのは⑥黄飛虎反商のエピソードである。このエピソードの死者で封神表に名のある賈氏と黄貴妃は黄飛虎の妻と妹であり、名のない張鳳、陳桐、陳梧は商周を隔てる五關のうち、三關の總兵である。商の武官トップの黄飛虎は妻と妹が紂王のために横死したことで出奔し、五關を突破して周に向かう。このとき、飛虎の邪魔立てをして命を落とすのが三關の總兵である（二關の總兵は死なない）。

『武王伐紂平話』でも飛虎は妻を殺されて紂王に反するから（卷中・八b）、來歴の古い妻が封神表に名があるのは道理である（ただし『武王伐紂平話』では妻の姓は耿氏に作り、妹は登場しない）。しかし『武王伐紂平話』では飛虎はこの時點では商から離反するだけで、周に歸順するのは武王東征の途中なので（卷下・一〇a）、五關破りのエピソードは存在しない。五關破りは『三國志演義』の「關雲長五關斬將」（嘉靖本卷八）を燒き直して後付けされたエピソードと思われる。したがって五關破りで死ぬ總兵たちも後付けだから、封神表に名を缺くのだろう。以下の章ではこのような檢討作業をゴシック體の死者すべてと、ゴシック體ではないが印象的な死者若干名に對して行うこととする。

二　四大諸侯

②④のエピソードの死者は紂王の暴虐の犠牲者たちである（③は文王の七年の幽閉期間に當り、話を變えて哪吒の誕生から七歲までの物語が展開される）。犠牲者たちは封神表に名がある者とない者に二分される。本稿の假説に照らせば、名がある者は古本に登場して死んでいたはずであり、名がない者は記載忘れもあるかもしれないが、少なくともゴシック體の重要人物である司天監杜元銑、南伯侯鄂崇禹、東伯侯姜桓楚三人は古本に登場しないか死ななかったはずである。第九十七回、滅亡間近の紂王の前に犠牲者たちの亡靈が現れるが（卷二〇・二〇a～二一a）、出てくるのは封神表に名のある梅伯、趙啓、姜皇后、黄貴妃、賈氏だけで（最後の二人は⑥のエピソードで死ぬ）、杜元銑、鄂崇禹、姜桓楚三人は出てこないのも、古本で三人が登場したり死んだりしなかった傍證だろう。

この三人にゴシック體ではない大夫膠鬲を加えた四人は『武王伐紂

平話』に遡れば、實際、登場しないか死なない人物だが（死なないのは姜桓楚で、他の三人は未登場）、四人にはもう一つ重大な共通點がある。『列國志傳』で初めて登場もしくは死亡した人物だということである。このことは舊稿で觸れた。[14] これは今本『封神演義』の成り立ちを解き明かす重要な情報である。

そもそも『封神演義』と先行作品二種の關係は『武王伐紂平話』→『列國志傳』→『封神演義』という單線的なものではない。『列國志傳』と『封神演義』には字句がほとんど同じ詩が何首もあるので、『封神演義』が直接『列國志傳』を參照したのは疑いないが、[15] 一方、『武王伐紂平話』にあって『列國志傳』にないエピソードや登場人物が『封神演義』にはあるので、『列國志傳』だけを參照して『封神演義』を書くことはできない。[16] しかしこれをもって『封神演義』は『武王伐紂平話』と『列國志傳』の兩方を參照したと解しては不正確もしくは不十分である。それでは『列國志傳』由來の死者が封神表に名がない理由を說明できないからである。これを說明できるのは三者の關係を次のように考える場合だけだろう。

『武王伐紂平話』は文章が梗概同然で、小說としては文字數に比して情報量が過多（登場人物や出來事が多すぎる）という缺點がある。そこで『武王伐紂平話』の子孫は文章に肉付けして、說明を詳しくし描寫を洗煉させる方向に發展したが、そのやり方の違いで二系統に分岐した。文字數はそのままで情報量を減らし、情報の中身を多少入れ換えた系統と、情報量を增やし、それ以上に文字數を增やして、情報の中身を大いに入れ換えた系統である。前者の末裔が『列國志傳』卷一であり、後者の末裔が古本『封神演義』である。

この二系統が再び合したのが今本『封神演義』である。だがそれは對等な合併ではない。古本『封神演義』は今本に劣らない規模と結構をすでに備えていて、その一部を『列國志傳』を參照して書き換える形で今本『封神演義』は成立したと考えられる。この書き換えによって、『武王伐紂平話』では死なず、古本でもおそらく死ななかった姜桓楚は死ぬことになり、未登場だった杜元銑、鄂崇禹、膠鬲は登場して死ぬことになった。ただ書き換えは本篇に對してのみ行われ、封神表には及ばなかったため、四人の名は今本の封神表に掲載されないままになったと說明できる。

ただしこの說には一見不利な情報もある。鄂崇禹の子鄂順が072北斗貪狼星として封神表に名があることである。本稿の假說では、これは鄂順が古本『封神演義』に登場して死んでいたことを意味するはずである（鄂順は『武王伐紂平話』『列國志傳』には未登場。『封神演義』では父の死後、南伯侯を繼いで商に反するが、㉗朝歌の戰いで死ぬ）。だが鄂という珍しい姓の人物が『史記』殷本紀の鄂侯（紂王の三公の一人）に由來する鄂崇禹と無關係に創作されるとは考えにくいので、鄂順がいたなら、鄂崇禹もいたと考えるのが自然である。これは鄂崇禹が古本に登場せず、『列國志傳』によって後付けされたという筆者の說に見直しを迫るように思える。しかしそうではない。鄂順の例は本稿の假說に對する反證ではなく、『封神演義』の改作が一度だけではなかった證據と見なすべきである。

『列國志傳』と『封神演義』は東伯侯姜桓楚、南伯侯鄂崇禹、西伯侯姬昌（文王）、北伯侯崇侯虎をもって四大諸侯とする。『武王伐紂平話』では鄂崇禹は登場せず、姜桓楚、文王、崇侯虎は登場するが、四大諸侯は構成しない。すると鄂崇禹だけでなく、四大諸侯としての姜桓楚、文王、崇侯虎も『列國志傳』を參照して古本『封神演義』に導

入されたことになる。だがそれでただちに今本『封神演義』が成立したわけではなかったのではないか。『列國志傳』を參照して四大諸侯を導入した改作のあとに、四大諸侯に關しては再度、改作が行われて死者が増え、それに合わせて封神表もこのときは例外的に修正されたことで、今本はようやく成立したと考えられる。つまり古本は一種だけでなく、複數種存在し、改作は古本と今本のあいだの一回かぎりではなく、複數の古本間でも行われていたことになる。このように考える根據は封神表中の北伯侯崇侯虎に關わる人名にあとから加えられた形跡があることである。

封神表の七十二地煞と九曜星は全員が萬仙陣死亡者ということになっているが（七十二地煞と九曜星の標題の下に「俱萬仙陣亡」という注記がある）、その中に崇侯虎ゆかりの人物が三人混じっている。七十二地煞の一番目、246地魁星陳繼眞、同じく七十二地煞の二番目、247地煞星黄元濟、そして九曜星の一番目、318崇應彪である。崇應彪は崇侯虎の子である。黄元濟は崇侯虎の將である。二人は⑤崇城の戰いで崇侯虎とともに死ぬ。陳繼眞は同音の陳繼貞が崇城の戰いに崇侯虎の將として登場する（第二十八回、卷六・三八a）。死んだ記述はないが、主君父子や僚將が軒並み殺される中で彼だけ生き延びたと考える理由はない。三人は萬仙陣の戰いで死んだわけではないのに、なぜ萬仙陣死亡者の中に混じっているのか。

清末の鉛印本は封神表から本篇未登場者の名を削って席を空けることで、死んだにも關わらず未掲載だった人物を表に加えたが[17]、これと同じ措置が古本を改作した段階でも崇應彪ら三人に對しては例外的に行われたと考えれば筋が通る[18]。崇應彪ら三人に限って例外措置が取られたのは、彼らを死なせた改作が他の改作とは異なるときに異なる改作者によって行われたからだろう[19]。この改作者は他の改作者と違って、本篇で死者を増やしたら、それに合わせて封神表を修正することを怠らなかったということである。

この勤勉な改作者が改作した範圍が崇侯虎關聯だけでなく、他の四大諸侯にも及んでいたとすれば、南伯侯鄂順も死んで名前が封神表に補われてもおかしくない。鄂順が北斗貪狼星として屬する五斗星二十八人は全員が本篇に登場するわけではなく、未登場者も含まれるので（068北斗武曲星黄景元）、鄂順は未登場者を削ることで五斗星に加えられたと考えることができる。

三　哪吒と楊戩

死者の全員が封神表に名がないエピソードが二つある。③と㉖である。この二つのエピソードは哪吒とともに後付けで挿入されたと考えられる。③哪吒出世のエピソードで死ぬ巡海夜叉李艮、東海龍王三太子敖丙、石磯娘娘、娘娘の弟子碧雲童子は哪吒と哪吒の師、太乙眞人によって殺される。哪吒は本來商周の歴史とは無緣の佛教神だから、哪吒師弟に殺される四人だけでなく、哪吒自身が『封神演義』に後付けされた人物だろう。このことは舊稿で論じた[20]。

㉖遊魂關の戰い（總兵竇榮とその妻、徹地夫人が死ぬ）で活躍するのは哪吒の兄、金吒と木吒だから、このエピソードも哪吒が後付けされたのと同時の改作において、兄二人の見せ場として挿入されたと考えられる。遊魂關の戰いは周軍本隊の戰いではなく、周と結んだ東伯侯姜文煥が主戰場とは別の場所で行う戰いだから、獨立性が高く、挿入は容易である。

ただし哪吒三兄弟は多くのエピソードで活躍するから、③と㉖の挿

入だけでなく、既存のエピソードの全面的な改作も行われたはずである。その痕跡がどこかに殘ってはいないだろうか。井口千雪は『三國志演義』には關羽の架空の息子關索の名を消して、魏延や馬岱の名に置き換えた形跡があることを指摘している。[21] このような小手先の改變が『封神演義』の哪吒に關しても行われなかったか、探してみると、⑰青龍關の戰いにそれらしき痕跡を見出せる。

第七十四回、哪吒と丘引（青龍關總兵）の戰いを述べる中に「二馬相交」（卷一五・四五b）の句があるが、哪吒が乘るのは尋常の馬ではなく風火輪なので、これはおかしい。[22] これだけなら戰鬪描寫の常套句を手癖で書いてしまったとも考えられるが、同じ葉（四五a）で哪吒は末子の黄天祥を失った黄飛虎を慰めて、「小將軍丹心忠義、爲國捐軀、清史簡篇、永垂不朽、亦不辜負將軍教養之功」と言う。やんちゃ坊主の哪吒らしくない分別くさい物言いである。これに先立ち、黄飛虎は長男の黄天化も失っているが、その際、南宮适がかけたのも「令郎爲國捐軀、萬年垂于青史」（第六十九回、卷一四・五二b）ということばだった。れっきとした武官の南宮适なら、こう言ってもおかしくない。青龍關の戰いで哪吒の役回りを演じていたのは本來、南宮适のような、馬に乘って型どおりのセリフを吐く人並みの武將だったと想像できる。

㉕孟津の戰いも哪吒同樣、本來商周の歴史とは無緣の二郎神楊戩が活躍するから、後付けで插入されたと考えられる。孟津は八百諸侯が會盟したことで名高い歴史的根據のある地名だが、經史でも『武王伐紂平話』（卷下・一〇b）でもここで戰鬪は行われないので、會盟以外は後付けと見て差し支えない。

孟津の戰いで死んだ未掲載者のうち、姚庶良（右伯）、彭祖壽（兗州侯）、余忠（鄂順の將）は影が薄いので記載忘れも考えられる。姚庶良と彭祖壽は設定上の地位こそ高いが、それまで影も形もなかったのが第八十八回、孟津の會盟に參じた諸侯として唐突に名が擧げられ（卷一八・三八b～三九a）、次の回で早速、戰死する「やられ役」に過ぎない。しかしこの三人以外の未掲載者、高明・高覺（千里眼・順風耳）、袁洪ら梅山七聖（七種の動物の化け物）、龍鬚虎（一本足の怪物）、鄔文化（二十萬人殺しの巨人）は個性派揃いなので、記載忘れは考えにくい。彼ら人外の未掲載者たちも未死か未登場で説明できる（したがって未掲載の人外と戰って死ぬ姚庶良ら三人も、記載忘れではなく未死か未登場と考えるべきだろう）。

高明・高覺は『武王伐紂平話』では二人に相當する人物（名は離婁・師曠とされる）が死なず、龍鬚虎も本來死ななかったと推定できることは舊稿で論じた。[23]

梅山七聖は『封神演義』では清源妙道眞君こと楊戩によって討ち取られるが、他の文獻では二郎神の眷屬とされる神である。[24]『三教源流搜神大全』では清源妙道眞君（姓名は趙昱とされる）の蛟退治を述べる中に「時有佐昱入水者七人、卽七聖是也」という文がある。[25]『西遊記』第六回では顯聖二郎眞君（姓は楊だが、名は未詳）本人と配下の六神將を併せて梅山七兄弟と稱する。[26] したがって『封神演義』の梅山七聖も楊戩の配下となるべき者たちである。通常の神魔小説なら生かして屈服させれば配下にできるのだが、神となるのに死を要する『封神演義』では楊戩に殺されるという形で緣を結ぶのだろう。

ただ七聖は封神表に名を缺き、本篇にも死後、何の神になるのか、直接的な説明がないので、楊戩配下の神であることがわかりにくくなっている（事實、鉛印本は七聖を封神表に加えるが、楊戩とは無緣の星神に

してしまっている）。しかし明言はされずとも、梅山七聖の稱自體、九龍島の四聖（死後、四聖大元帥に封ぜられる）や金鰲島の十天君（天君は雷神の號）と同様、死後の封を先取りした稱であり、七聖が死んで楊戩配下の神に封ぜられることを豫告している。にもかかわらず七聖の名が封神表にないのは、彼らだけでなく、主の楊戩自身が古本に未登場だったからだと考えられる。

ただし梅山七聖は封神表に名がないというのは嚴密には正しくない。七聖の一人、戴禮のみ099力士星として名がある。これはなぜだろうか。『封神演義』では梅山七聖の正體は畜生である。袁洪は白猿精、常昊は長蛇精、吳龍は蜈蚣精、朱子眞は猪精、楊顯は羊精、金大升は水牛精、そして戴禮は狗精である。袁洪以下五人の姓が正體を暗示しているのに對し、水牛の金大升と狗の戴禮はそうではない。狗の戴禮が力士星に封ぜられるのも似つかわしくない（鉛印本では力士星は巨人鄔文化にすげ替えられて、戴禮は181荒蕪星に移る）。戴禮は元々狗精でも七聖でもない人間の戰死者だったのが、楊戩が後付けされた際、七聖の一人の名として利用されたのではないか。

孟津の戰いで死んだ未掲載者で問題なのは巨人鄔文化である。彼の場合、未掲載の理由を登場しなかったことや死ななかったことに求めることは一見、できそうにない。彼は『武王伐紂平話』『列國志傳』『封神演義』に一貫して登場し、谷間に誘いこまれて燒き殺されるという死に方も共通するからである（ただし『武王伐紂平話』卷下・七a、『列國志傳』卷一・五九aでは姓名は烏文畫に作る。また孟津の戰いがない『武王伐紂平話』『列國志傳』では、周軍は黄河を渡る前に烏文畫と交戰する）。

しかし『武王伐紂平話』と『封神演義』に共通して登場する人物も動向や結末は變化していることが多いのに、烏文畫／鄔文化がほとんど變らないのはかえって不審とも言える。『封神演義』で名前が鄔文化に變化していることを考え合わせると、『武王伐紂平話』から古本『封神演義』に至るまでに烏文畫は名前だけでなく物語も相當に變化し、ことによると命を永らえてさえいたのが、今本『封神演義』では『列國志傳』を參照して古い形にもどされ、鄔文化は元どおり死ぬことになったのかもしれない。つまり鄔文化の未掲載も、確證は缺くが、古本で死ななかったことを意味すると思われる。

四　妲己

『封神演義』の謎の一つは妲己の名が封神表にないことである。妲己の妹分、九頭雉鷄精の胡喜媚と玉石琵琶精の王貴人の名もないが、二人は『武王伐紂平話』に未登場だから、それを未掲載の理由と考えることもできる。しかし妲己は『武王伐紂平話』に登場して死ぬし、商周革命の惡役として不可缺の彼女が登場しなかったり、死を免れたりする中間段階が存在したとも思えない。

ただし『武王伐紂平話』まで遡れば、妲己は封神の對象外ではある。『武王伐紂平話』で封神されるのは戰に負けて命を落とす武人に限られ、文臣や女性は横死しても神に封ぜられない。しかし『封神演義』の封神表には文臣や女性の名もあるから、封神表が作られた段階では封神の對象はすでに擴大していたはずである。

まず考えられるのは妲己が化け物であることが忌避された可能性である。禽獸木石が人に變化した化け物で、本篇で死ぬ者を列擧すると、千年狐狸精の妲己と妹分二人のほかに石磯娘娘（頑石）、龜靈聖母（烏龜）、丘引（蚯蚓）、高明（桃）、高覺（柳）、梅山七聖（蛇、蜈蚣、猪、羊、狗、水牛、猿）がいる。このうち、封神表に名があるのは七聖中の戴

禮だけであり、戴禮にしても、狗精の戴禮なのか疑問があることは前章に述べたとおりである。

ただし化け物の多くが封神表に未掲載であることは必ずしも彼らが封神の對象外であることを意味しない。桃精柳鬼の高明・高覺は封神表にこそ名を缺くが、本篇では死亡時に魂が封神臺（封神を待つ魂の集積所）に行ったことが明記されるし（第九十一回、卷一九・二a）、死んで門神の神荼・鬱壘に封ぜられる設定があったことは二人との戰いが描かれる第九十回の回目「子牙捉神荼玉壘」（卷一八・五八a）から窺える。梅山七聖もその稱自體が二郎神配下の神となることを豫告している。結局のところ、大方の化け物も人間の死者同樣、未掲載の理由は未死か未登場で說明できる。

蚯蚓精の丘引はまだ檢討していなかったが、やはり未死と考えられる。彼は青龍關の總兵だが、⑰青龍關の戰いでは死なず、㉒萬仙陣の戰いで再登場する。しかし何の活躍もなく、再登場した途端に死ぬので（第八十四回、卷一七・五四a）、青龍關で生存させた意味がない。思うに丘引は古本では青龍關で退場したあと、再登場せず、始末を付ける必要を感じた改作者によって萬仙陣の戰いにねじこまれたのではないか。つまり丘引も本來死なない人物であり、化け物であることが忌避されて封神表に名がないわけではない。

しからば妲己が封神されないのは、化け物全般ではなく、妲己個人が忌まれたからなのか。鉛印本は石磯娘娘、丘引、梅山七聖は忌まずに封神表に加えているのに妲己三姉妹は未掲載のままだから、少なくとも鉛印本ではそうなのだろう（高明・高覺も未掲載のままだが、封神されることを示す本篇の記述は削らず殘されているので、意圖的に掲載しなかったわけではあるまい）。

妲己と他の化け物を劃するものがあるとすれば、他の化け物が架空の人間に化けて架空の人名を名乘るのに對し、狐狸精妲己は人間妲己を殺して、彼女の名前と姿を奪ったことである。するとまず封神されるべきは狐狸精妲己ではなく人間妲己ということになる。中塚亮によると、後世の戲劇には實際、人間妲己を神に封ずるものがある。[27]『封神演義』では狐狸精だけでなく人間の妲己も封神されないが、なればこそ、人間妲己を差し置いて狐狸精妲己を封神することは許されなかったとも考えられる。

附表のゴシック體の人物で殘ったのは⑯の火靈聖母と⑱の一氣仙余元である。二人とも商の武官となっていた弟子（061南斗星胡雷と131孤辰星余化）が戰死したことで、復仇のために下山して商に助太刀するが、あえなく命を落とす。二人は門弟を抱えた大物の仙人なのでゴシック體にしたが、大物なのは設定上だけで印象はいたって薄い。火靈聖母は火仙としての存在感が033火德星君羅宣に劣り、余元は弟子の二番煎じに過ぎない。したがって單なる記載忘れもありうるが、二人のエピソードは蛇足な上、展開が判で押したように同じで後付けが容易だから、二人の未掲載は未登場でも說明できる。

以上で封神表の重要な未掲載者は一部の例外を除くと、古本で未死か未登場だった者として說明することができた。一部の例外に當る者はそもそも封神の對象外だった可能性があるので（西方教に移籍後に死んだ龜靈聖母や、人間妲己を乘っ取った狐狸精妲己）、この說明は封神の對象者なのに封神表に名のない重要人物すべてに適用しうる普遍性がある。したがって『封神演義』において、本來死ななかった人物や登場しなかった人物を死なせる改作が行われた蓋然性はかなり高いと言えるのではないか。

五　鄧華

これまで見てきたのは重要人物なのに封神表に名がない死者だが、重要人物とは言えない未掲載者の中にも記載忘れではなく、未登場によって説明できる者がいる。

⑩のエピソードの第四十三回、周を攻めあぐねる商の太師聞仲のもとに金鰲島の十天君が來援する。彼らは十絶陣を布いて、姜子牙たちに挑戰する（ここで言う陣とは軍隊の陣形のことではなく、諸葛孔明の八陣圖の延長線上にある魔術的な結界のことである）。十絶陣の戰いはまず周側の武人や道士一人が一個の陣に入って命を落とし、次いで高位の仙人が陣を破って陣主を討ち取るというパターンを繰り返して、一個一個攻略される。ただし二陣は犠牲者なしに攻略されるので、十絶陣の戰いにおける周側の死者は八人である。この八人のうち、三人が封神表に名がない。名のある五人と名のない三人には明確な違いがある。名のある336增福神韓毒龍、338顯道神方弼、337掠福神薛惡虎、339開路神方相、350納珍天尊曹寶は十絶陣の戰いで自分の出番が來る以前から登場しているのに對し、名のない鄧華、蕭臻、喬坤は十絶陣に應戰するために初登場して即死亡することである。即席の犠牲者三人が後付けであることは歴然だろう。

しからば十絶陣は本來、三陣少ない七絶陣だったのだろうか。その可能性もあるが、諸葛孔明の八陣が八個の陣ではないように、十絶陣も元々は一個の陣の名稱だったということも考えられる。それを十個の陣と解釋し直し、本來、別の死に方をしていた五人を五陣の犠牲者に再配置し、新たに三人の犠牲者を創作して三陣に當てたのが、今本『封神演義』の十絶陣の戰いなのではないか。[28]

ただし封神表に名のない犠牲者三人の中には單なる數合わせにとどまらない者が一人いる。秦天君の天絶陣の犠牲者、鄧華である。第四十五回、秦天君と鄧華の戰いは次のように描寫される。

一個是雷部天君施威仗勇、一個是日宮神聖氣概軒昂。正是、封神臺上標名客、怎免誅身戮體災。（卷九：六二a）

かたや勇猛果敢なる雷部の天君、かたや意氣軒昂たる日宮の神聖。これぞまさしく、封神臺に名を記されし者ども、いかでか身を殺す災いを免れんやというところ。

「雷部天君」がもとより秦天君を指す以上、それに對する「日宮神聖」とは鄧華にほかならない。そして「日宮」とは太陽神の宮殿、あるいは太陽そのものを指すから、彼は太陽に關わる神である。果して鄧華に通ずる鄧化という姓名の太陽神が他の神魔小説や道教文獻に登場する。『五顯靈官大帝華光天王傳』卷二「靈耀大閻瓊花會」則では鄧化は卯日宮に勤務する神である。[29]『道法會元』卷一三五「太一天章陽雷霹靂大法」では「太陽引駕大將軍鄧化」と稱されて、古代神話の羲和のごとき太陽の御者として遇される。[30]

このように鄧華は元々『封神演義』の外で信仰されていた太陽神だった。後付けの跡が歴然としている鄧華が由緒ある神であることは、『封神演義』が既存の神々を加える目的で改作された可能性を示唆する。

小　結

『封神演義』の封神表には本篇で死んだ人物、約六十人の名が缺け

ている。これは本篇を改作して彼らを死なせたのに、それに合わせて封神表を修正するのを怠ったことが原因と考えられる。しかし崇應彪など若干名は本篇の改作に合わせて封神表に名前が補われた形跡がある。これは六十人を死なせた改作とは態度が異なるので、『封神演義』の改作は少なくとも二回行われたことになる。さらに六十人の改作もすべて一度に行われたとは限らないので、改作は二回だけにとどまらなかった可能性がある。

孫楷第はかつて『封神演義』の成書に關して二つの可能性を提示した。第一は「自元而後，遞增遞演，乃成今之『封神演義』」、第二は「然今本『封神傳』以淺近之文言演之，……似以短促期閒發憤爲之者」[31]。ただし孫氏はこの時點では『封神演義』の先行作品として『武王伐紂平話』しか知らなかった。その後、柳存仁らによって『列國志傳』卷一もまた『封神演義』の先行作品であることが明らかになると、孫氏の第一の説は顧みられなくなり、第二説のような見方が主流になった。『封神演義』は『列國志傳』のあとに一氣に成ったという見方である。だが本稿の推定は孫氏の第一の説、「遞增遞演」式の成書をこそ支持する。『封神演義』は時間をかけて段階的に成立し、『列國志傳』は最後に近い段階で部分的に參照されたに過ぎないと考えられる。

ところで本稿で俎上に載せた改作は、封神表と本篇の齟齬を根據とする以上、封神表が成立して以後に行われた改作に限られる。だが封神表成立前の段階でも改作が行われていた可能性は當然考えられる。その證據を擧げるのは難しいが、『武王伐紂平話』まで遡れば、その時點ですでに改作を經ていた痕跡が見出せる。

『武王伐紂平話』では紂王の太子殷交は太歲神の下凡とされる（卷上・四b）。ところが『武王伐紂平話』には太歲神がもう一人登場する。卷下・八bに商の諸將の姓名が列擧され、併せて何の神に封ぜられるか、注記されるが、その中に「戍庚、此人封爲太歲神」という記述があるのである。戍庚はひっくり返すと庚戌になるので（「戍」と「戌」は通用すると見なす）、六十甲子太歲の一柱かもしれない。それなら、『封神演義』に332値年太歲殷郊とは別に333甲子太歲楊任がいるように、二人いても矛盾はない。だが庚戌が十干十二支を代表する謂れがわからない。それよりも「歲」字の聲符は「戌」なので（『說文』二上）、猢猻が孫姓、猿が袁姓、蜈蚣が吳姓を名乘るように、太歲神は戌を姓としたと考えたほうが良いだろう。つまり戍庚も狹義の太歲神にほかならず、『武王伐紂平話』には同じ神が重複していることになる。

この矛盾は次のように説明できる。戍庚は『武王伐紂平話』の中で創作された人物だが、殷交は架空であっても、元々『武王伐紂平話』の外で廣く信仰されていた名高い神である[32]。この有名な太歲神殷交は『武王伐紂平話』に後付けで加えられたが、その際、太歲神が目立たない一部將として、すでに登場していたことは見過ごされてしまった。それが重複の原因だと。つまり二人の太歲神も改作の痕跡であり、孫楷第の言う「遞增遞演」が『封神演義』に局限されない、武王伐紂の物語全體に涉るものだった可能性が見えてくる。さらに哪吒や楊戩のような商周の歷史と無緣の神を登場させる改作が『封神演義』に始まるわけではないことも窺える。

元代から明末に至るまで、武王伐紂の物語に加えられた改作は、『武王伐紂平話』から『列國志傳』への改作や、古本『封神演義』に『列國志傳』を導入した改作のように史實に寄せることを目的としたと思しきものもある。しかし多くはそれとは逆方向、商周の歷史とは

本來、無緣の神を登場させるための改作だった。それは歴史小説の矩を踰えて神魔小説と化し、神が飽和狀態となるまでやむことがなかった。このような他の歴史物語にはない特異な現象が、なぜ武王伐紂の物語に限って生じたのか。この問題については稿を改めて論じたい。

注

（1）拙論「『封神演義』の簡本について」（『汲古』第五十一號、二〇〇七年）、および「『封神演義』の上圖下文本について」（『和漢語文研究』第二十號、二〇二二年）。

（2）拙論「『封神演義』第九十九回の問題」（『汲古』第六十五號、二〇一四年）。

（3）拙論「『封神演義』版本概論」（『和漢語文研究』第十九號、二〇二一年）、一三九～一四一頁。

（4）以下、國立公文書館内閣文庫の藏書は「國立公文書館デジタルアーカイブ」（https://www.digital.archives.go.jp）で公開される書影による。最終アクセス日、二〇二三年五月二十日。

（5）舒本の底本、および廣い意味での今本の範疇内にある祖本については、前掲「『封神演義』の上圖下文本について」で論じた。

（6）『武王伐紂平話』は内閣文庫藏。『列國志傳』は萬曆四十三年（一六一五）序の朱篁本を底本とする。中國國家圖書館藏。「中華古籍資源庫」（http://read.nlc.cn/thematDataSearch/toGujiIndex）で公開される書影による。最終アクセス日、二〇二三年五月二十日。

（7）『武王伐紂平話』全三卷の半葉數の合計は八十三。毎半葉の字數が『武王伐紂平話』（二十行二十字）のちょうど半分（十行二十字）の『列國志傳』龔紹山本（内閣文庫藏）は卷一の半葉數が『武王伐紂平話』のほぼ二倍の百六十七だから、字數はほぼ等しい。『封神演義』舒本（龔紹山本と同じ十行二十字）は『古本小説集成』（上海古籍出版社）所收の影印本によると全二七九八頁。

（8）魯迅『中國小説史略』第十八篇「明之神魔小説（下）」。民國三十年全集版、一七六頁。

（9）江蘇古籍出版社、一九九一年版の標點本『封神演義』の章培恆「前言」、二～三頁。ただし『平妖傳』の原刊本に言及がないことをもって、泰昌元年には『封神演義』は未成書だったとする見解には同意できない。筆者は前掲「『封神演義』の上圖下文本について」において、蘇州刊の舒本が『封神演義』最初の江南本で、それ以前は建陽本しか存在していなかった可能性を指摘した（一〇七頁）。したがって『平妖傳』泰昌原刊本の時點では『封神演義』はまだ全國的な評判を勝ち得ておらず、『平妖傳』崇禎重刊本までに舒本が刊行されたことで、初めて江南人の眼中に入ったとも考えられる。

（10）神々のリストは原文には名がない。「封神表」の稱は、二階堂善弘監譯、山下一夫・中塚亮・二ノ宮聰譯『全譯封神演義1』（勉誠出版、二〇一七年）の二階堂のコラムから借りた。

（11）前掲「『封神演義』第九十九回の問題」、四九頁。

（12）上原究一「百回本『西遊記』の成立と展開――書坊間の關係を視野に――」（東京大學大學院人文社會系研究科博士論文、二〇一六年）、三〇頁。

（13）十五人中の051黄天祿は商周の戰いが終ったあとの第九十八回に生存している記述があるが（卷二〇・三九a）、これは弟の黄天爵の誤りだろう。天爵は黄家の祭祀を絶やさぬため、第七十四回に前線から退けられた（卷一五・四七a）。

（14）前掲「『封神演義』第九十九回の問題」、五〇頁。

(15) 柳存仁「元至治本全相武王伐紂平話明刊本列國志傳卷一與封神演義之關係」(『和風堂文集』、上海古籍出版社、一九九一年)。

(16) 二階堂善弘『封神演義の世界――中國の戰う神々』(大修館書店、一九九八年)、七八頁。

(17) 封神表を改變する最古のテキストは光緒十五年(一八八九)・上海廣百宋齋鉛印本だが、日本には藏されず、閲覽の便を得ないので、本稿では鉛印本は架藏の光緒十六年・珍藝書局本による。

(18) 萬仙陣の戰いで死んだわけではないのに封神表で萬仙陣死亡者としてあつかわれる人物はほかに108天醫星錢保がいる(下注に「皆萬仙陣」とあるが、彼は⑬張山らとの戰いで死ぬ)。しかし崇應彪ら三人と同樣の解釋を錢保に對しても行って良いか、わからない。全員が萬仙陣死亡者の七十二地煞・九曜星とは異なり、天醫星を含む075〜189羣星は萬仙陣死亡者とそうでない者が混在しているが、その區分は非常に亂れているので、錢保が萬仙陣死亡者としてあつかわれることに單なる誤り以上の意味はないかもしれないからである。

(19) 崇應彪は『武王伐紂平話』には登場せず、『列國志傳』で初めて登場したが、『列國志傳』では『封神演義』と異なり、崇應彪は父と運命をともにせず、生きて崇國の社稷を守ることが許される(四四b)。ただし『列國志傳』でも崇應彪は最終的には死ぬ。武王東征途上の五武寨と五星寨の戰いに商軍の大將として再登場し、敗死するのである(七〇b〜七三a)。『武王伐紂平話』にも五武寨と五星寨の戰いはあるが、商軍の大將を務めるのは父の崇侯虎である(卷下・八b〜九b)。しかし『詩』大雅・皇矣、文王有聲や『史記』周本紀など、經史はみな伐崇を武王ではなく文王の代のこととするので、『列國志傳』は史實に合わせて崇侯虎の死を前倒しし、五武寨と五星寨の戰いにおける崇侯虎の役割は息子を創作して肩代りさせたのだろう。『封神演義』には五武寨と五星寨の戰い自體がないので、『列國志傳』を參照して改作した段階では、崇應彪は崇城の戰いを生き延びて物語から退場していたが、その後、再び改作されて、崇城の戰いで死ぬことになったと思われる。

(20) 前掲『『封神演義』第九十九回の問題」、五〇頁。

(21) 井口千雪『三國志演義成立史の研究』(汲古書院、二〇一六年)第四章「關索說話に關する考察」。

(22) このおかしさは二階堂善弘監譯『全譯封神演義3』(勉誠出版、二〇一八年)、四二七頁の注が指摘している。

(23) 前掲『『封神演義』第九十九回の問題」、四九〜五〇頁。

(24) 梅山七聖の『封神演義』への導入については、中野美代子「民間信仰のなかの『封神演義』――臺灣紅頭法師の傳授書をめぐって――」(『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』、汲古書院、一九八六年)、六一八〜六二一頁が論じている。

(25) 『繪圖三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社、一九九〇年)、一一三、四〇〇、五三八頁。

(26) 『古本小說集成』所收の『西遊記(世德堂本)』卷二・五a〜六a(一三一〜一三三頁)。

(27) 中塚亮「武王伐紂故事の演劇における展開―「進妲己」を例として―」(『愛知淑德大學論集―文學部篇―』第四十八號、二〇二三年)、三二頁。

(28) 第三十一回、蕭銀という人物が黃飛虎の五關破りに協力したあと、「後來蕭銀要會在十絕陣內、此是後話、不表」(卷七・七b)という、十絕陣での再登場を豫告する一文とともに退場するが、十絕陣はおろか、二度と登場しない。これは十絕陣の戰いが大幅に改作された痕跡かもしれない。

(29) 『古本小說集成』所收の『華光天王傳』卷二・三a(四七頁)。

(30)『道藏』正一部。上海版、東三・八a。鄧化の原型は追日神話の夸父かもしれない。夸父ゆかりの地名に鄧林（桃林）があるが（『山海經』海外北經によると、夸父が捨てた杖が桃林となった）、唐・張鷟『朝野僉載』卷五に記される異聞では夸父は「鄧夸父」と稱される。鄧化はその訛ではないか。夸父は太陽のうしろを走っていたはずだが、いつしか前後が入れ替り、太陽の追走者から太陽の御者へと變化したことになる。

(31) 孫楷第『日本東京所見小說書目』（人民文學出版社、一九五八年）、三頁。初版は一九三二年。

(32) 二階堂善弘『明清期における武神と神仙の發展』（關西大學出版部、二〇〇九年）第三章「太歲殷郊考」を參照。

附表　『封神演義』本篇の死者

エピソード	封神表に名のある死者	封神表に名のない死者
①蘇護と崇侯虎の戰い	[2]048 東斗星金葵(奎)，053 西斗星孫子羽	[2] 梅武
②紂王の暴虐(文王拘幽前)	[6]088 天德星梅伯(栢)，[8]082 太陰星姜皇后，[9]083 玉堂星商容，[10]090 天赦星趙啓	[4] 人間妲己，[6] **杜元銑**，[8] 姜環，楊貴妃，[11] **鄂崇禹**，**姜桓楚**
③哪吒出世		[12] 李艮，**敖丙**，[13] 碧雲童子，[14] **石磯娘娘**
④紂王の暴虐(文王拘幽後)	[19]059 北極紫微大帝伯邑考，[27]067 北斗文曲星比干，089 月德星夏招	[17] 膠鬲，[23] 王相
⑤崇城の戰い	[28]247 地煞星黃元濟，[29]122 大耗星崇侯虎，318 九曜星崇應彪	[28] 梅德，金成，[29] 文王
⑥黃飛虎反商	[30]091 貌端星賈氏，109 地后星黃貴妃	[31] **張鳳**，[32] **陳桐**，**陳梧**
⑦張桂芳・四聖との戰い	[36]084 天貴星姬叔乾，[37]001 清福神栢鑑，[39]344 四聖王魔，346 四聖高友(體)乾，345 四聖楊森，116 弔客星風林，115 喪門星張桂芳，347 四聖李興霸	
⑧魯雄との戰い	[40]327 水德星魯雄，117 勾殺星費仲，118 卷舌星尤渾	
⑨魔家四將との戰い	[41]353 增長天王魔禮青，354 廣目天王魔禮紅，355 多文天王魔禮海，356 持國天王魔禮壽	[40] 馬成龍
⑩聞仲・十天君・趙公明・三霄娘娘との戰い	[45]017 秦(程)天君完，336 增福神韓毒龍，[46]338 顯道神方弼，019 董天君全，337 掠福神薛惡虎，020 袁天君角，031 閃電神金光聖母，022 孫天君良，[47]349 招寶天尊蕭昇，[48]023 百(栢)天君禮，339 開路神方相，025 姚天君賓，350 納珍天尊曹寶，[49]024 王天君變，348 玄壇眞君趙公明，[51]367 感應隨世仙姑瓊霄娘娘，368 感應隨世仙姑碧霄娘娘，026 張天君紹(詔)，018 趙天君江，032 助風神菡芝仙，011 張天君節，012 陶天君榮，[52]029 吉天君立，009 鄧天君忠，030 余天君慶，010 辛天君環，008 九天應元雷聲普化天尊聞仲	[45] 鄧華，[46] 蕭臻，喬坤，[48] 姚少司，陳九公，[51] 彩雲仙子
⑫蘇護・呂岳・殷洪との戰い	[59]040 東方行瘟使者周信，041 南方行瘟使者李奇，042 西方行瘟使者朱天麟，043 北方行瘟使者楊文輝，[60]013 龐天君弘(洪)，016 畢天君環(完)，[61]153 五谷星殷洪，014 劉天君甫，015 苟天君章	[60] 武榮
⑬張山・羅宣・殷郊との戰い	[62]108 天醫星錢保，[64]038 接火天君劉環，[65]033 火德星君羅宣，107 皇恩星李錦，080 滕蛇星張山，[66]332 值年太歲殷郊	[64] 溫良
⑭洪錦との戰い	[66]136 八敗星栢顯忠(栢忠)	[66] 姬叔明
⑮孔宣との戰い	[69]002 炳靈公黃天化，[70]151 黑殺星高繼能	[69] 陳庚，孫合，周信
⑯佳夢關の戰い	[71]078 玄武星徐坤，055 西斗星胡雲鵬，061 南斗星胡雷，[73]054 西斗星胡升(昇)	[72] **火靈聖母**
⑰青龍關の戰い	[73]077 朱雀星馬方，062 南斗星高貴，063 南斗星余成，064 南斗星孫寶，075 青龍星鄧九公，[74]066 北斗天罡星黃天祥，358 哈將陳奇	
⑱汜水關の戰い	[75]131 孤辰星余化，[76]069 北斗左輔星韓昇，070 北斗右弼星韓變，165 狼籍星韓榮	[74] 王虎，[75] **余元**
⑲界牌關の戰い	[78]113 黃旛星魏賁，050 東斗星趙丙，053 西斗星孫子羽，119 羅睺星彭遵，120 計都星王豹	
⑳穿雲關の戰い	[78]143 血光星馬忠，[80]125 欄杆星龍安吉，130 官符星方義眞，[81]044 勸善大師陳庚，039 瘟瘟大帝呂岳，140 歲刑星徐芳	[81] 李平
㉑潼關の戰い	[81]126 披頭星太鸞(欒)，047 東斗星蘇護，[82]363 南方痘神余光，361 東方痘神余達，364 北方痘神余先，362 西方痘神余兆，365 中央痘神余德，359 碧霞元君余化龍	
㉒萬仙陣の戰い	[83]086 紅鸞星龍吉公主，085 龍德星洪錦，[84]046 斗母金靈聖母	[83] **龜靈聖母**，[84] **丘引**
㉓臨潼關の戰い	[84]135 死符星卞金龍，[86]144 亡神星歐陽淳(平)	[84] 桂天祿，[86] 卞吉
㉔澠池の戰い	[86]133 病符星王佐，137 浮沉星鄭椿(春)，005 中岳大帝文(聞)聘，004 南岳大帝崇黑虎，006 北岳大帝崔英，007 西岳大帝蔣雄，003 東岳大帝黃飛虎，[87]096 土府星土行孫，097 六合星鄧嬋玉，[88]162 桃花星高蘭英，152 七殺星張奎	[86] 姬叔明，姬叔昇，黃飛彪
㉕孟津の戰い	[91]333 甲子太歲楊任，[92]099 力士星戴禮，357 哼將鄭倫	[89] **姚庶良**，**彭祖壽**，[91] 高明，高覺，常昊，吳龍，龍鬚虎，[92] 鄔文化，余忠，朱子眞，楊顯，金大升，[93] **袁洪**
㉖遊魂關の戰い		[94] **寶榮**，徹地夫人
㉗朝歌の戰い	[94]074 北斗招搖星董忠，105 帝輅星 138 大殺星丁策，073 北斗巨門星郭宸(振)，123 小耗星殷破敗，[95]076 白虎星殷成秀，[96]072 北斗貪狼星鄂順，065 南斗星雷鵾(昆)，056 中斗星魯仁傑	[96] 雷鵬
㉘商の滅亡	[97]087 天喜星紂王，[98]163 鐵掃箒馬氏，[100]370 氷消瓦解之神飛廉，371 氷消瓦解之神惡來	[97] 胡喜媚，王貴人，**狐狸精妲己**，朱昇，[100] 宋異人，孫氏